

野尻湖におけるブラックバスフィッシングの導入と その地域的意義

横山貴史

キーワード：ブラックバス、バスフィッシング、観光、野尻湖

I はじめに

ブラックバスフィッシング（以下、バスフィッシング）とは、北米原産であるサンフィッシュ科肉食淡水魚類ブラックバスを、「ルアー」と呼ばれる疑似餌で誘い、釣り上げるスポーツフィッシングである。現在、日本全国の河川湖沼の多くでブラックバスの生息が確認されている。肉食の食性で在来種に影響を与える害魚として見られる一方で、バスフィッシングの愛好者にとっては遊漁対象魚と認識されている。バスフィッシングでは、釣り上げた魚の体長を計測後、即座に再放流（リリース）する「キャッチ&リリース」が釣り人のマナーとされている。一方で行政は在来種を保護するという立場からブラックバス駆除の姿勢をとる。そのため、行政とバスフィッシング愛好家との間で、「ブラックバス」という一つの魚類資源を巡って対立する構図が日本各地の河川湖沼で引き起こされている。主に水産学の分野で、ブラックバスが在来種に対していかなる影響を与えるのか、また駆除すべき存在であるのかという点についての論考が多く蓄積され、議論の最中である。しかし、「ブラックバス」の遊漁対象魚としての経済的価値が認められていながら、地域にいかなる影響を与えたのかといったような点は、佐藤（2003）の茨城県霞ヶ浦のマリーナを拠点とするプレジャーボートの展開と行動水域に関する論

考で取り上げられている以外は皆無である。経済的価値が地域に与える影響とは、具体的にいえば釣り客が訪れることによる観光的要素である。生物学的観点のみならず、多角的にブラックバスを捉えることは、その是非を議論する上で重要であると考えられる。

現代の観光行動は多様化しており、能動的な「見る観光」から受動的な「する観光」への転換に伴い、スキー、スキューバダイビングなど新たなレクリエーション需要に対応した観光地が形成されてきた（山村、1995）。地理学の分野においても、群馬県片品村において1980年代以降のスキー観光地域の変容を明らかにした呉羽（1991）や、静岡県伊東市富戸においてスキューバダイビング導入に伴う地域社会の変容を明らかにした池（2001）などによって多くの事例が報告されている。上述したようなバスフィッシングも、新しいレクリエーションに対応した例であると位置づけることができる。

これまでの湖に関する観光研究は数こそ少ないが、湖畔の観光開発といった陸域での動態と、水域での観光行動を取り上げた研究に大別される。前者には、山村（1989）、山本（2002）らによる一連の山梨県山中湖畔の観光開発の研究や、山下（2001）の長野県諏訪湖畔の観光資源に関する研究がある。また、後者には北海道千歳市支笏湖において、既存の遊覧船事業やボートと、水上バ

イクヤスキューバダイビングといった新しいマリインレジャーとの空間共有について論じた荒木(1995)、前述の佐藤(2003)などがある。山下(2006)は、これまでの湖の観光研究は陸域と水域を分けて扱ってきたと指摘しており、長野県諏訪湖の環境変化への観光業者の対応を論じている。本報告でもこの指摘を踏まえ、ブラックバスフィッシングの成立要因の一つとして、水域における観光的利用形態も考慮する。

以上を踏まえ、本報告では、長野県上水内郡信濃町に位置する野尻湖におけるブラックバスフィッシングの現状と課題を明らかにし、導入が地域に与えた意義を論じることを目的とする。手順としては、まずⅡで伝統的な避暑地であった野尻湖の歴史とその変遷を述べ、Ⅲでバスフィッシングの導入、観光業者の実態、バス釣り客の集客圏、湖面の観光的利用形態など、バスフィッシングの実態を明らかにし、Ⅳでバスフィッシングの導入が野尻湖に与えた意義を論じる。

日本におけるブラックバスの導入は、戦前に赤星鉄馬により食用目的で持ち込まれたのが最初である。その後、日本でバスフィッシングブームが高まるのに伴い、無秩序に日本中の河川湖沼に拡散していった。なお、ブラックバスという名称は通称で、生物学的にはオオクチバス(ラージマウスバス)とコクチバス(スモールマウスバス)の2種類に分けられる¹⁾。コクチバスの方が寒冷地に適応できるとされ、引きが強く遊魚対象魚として魅力的とされる。本報告ではラージマウスバスを「オオクチバス」、スモールマウスバスを「コクチバス」と称する。

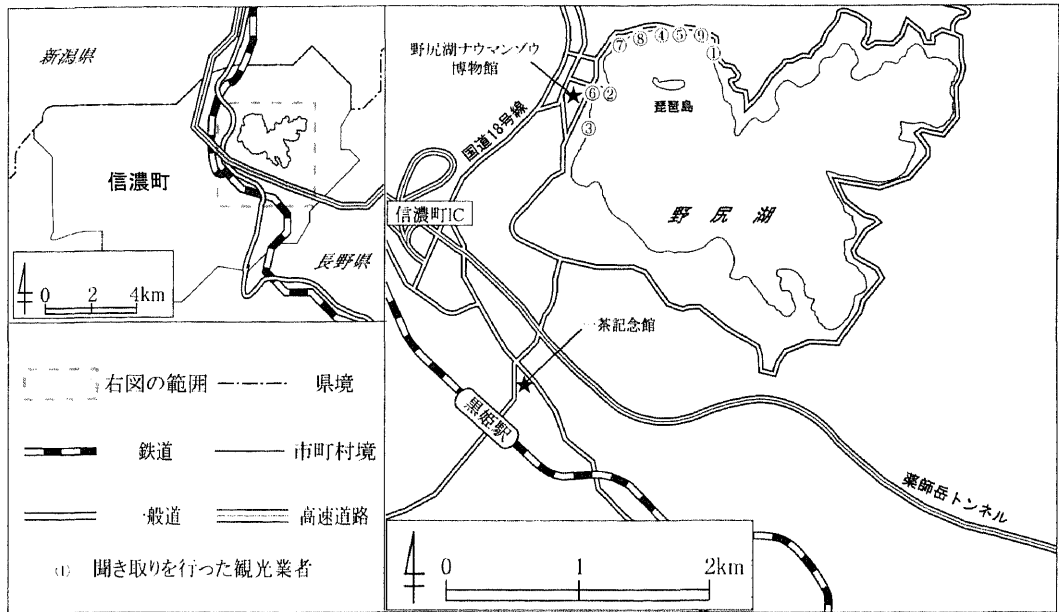
研究対象地域である野尻湖は、長野県北部、新潟県との県境に面する上水内郡信濃町に位置する。その成因は火山噴出物による堰止湖とされている。水深は最深部が38.3mと、長野県内で3番目に深く、透明度の高い湖で、面積は諏訪湖に次いで2番目に大きい。その湖岸線は複雑で、西側の野尻地区側は比較的湖岸が平坦で遠浅な湖底をしているが、それ以外の部分は、山地が湖岸まで迫り、水深も急激に深くなる。そのため、北東部

の菅川地区を例外として、主として西方の野尻地区側に集落が形成され、そこに宿泊業や飲食業、貸ボート店などの観光関連業者も立地している。ちなみに菅川地区はその隔絶性ゆえに、戦後まで水上交通に依存していた。以上のような、複雑な湖岸が芙蓉の葉を思わせることから、「芙蓉湖」とも称される。

近隣には江戸期の俳人小林一茶の生地として有名な柏原宿がある。また、1948年に湖畔の旅館業者によってナウマンゾウの化石が発見されたことで、日本の考古学における重要な研究の舞台ともなってきた。これら二つの要素は、信濃町の重要な観光資源であり、「小林一茶記念館」「野尻湖ナウマンゾウ博物館」が建設されている。1956年に上信越高原国立公園に編入された。西にはスキー場やペンションが立地する観光地である黒姫高原を擁している。1997年に上信越自動車道信濃町インターチェンジが開設され、東京からのアクセスが向上している(第1図)。

Ⅱ 野尻湖畔における観光の変遷

野尻湖畔は、明治末頃から避暑の適地と認識され、別荘や旅館が建設されていた。その大規模な開発に神山国際村がある。神山国際村は、宣教師ノルマン氏によって1920年に発案され、地元の名士であった池田万作氏によって1921年に設立された外国人別荘地である²⁾。ノルマン氏が野尻湖に着目した理由は、外国人宣教師が当時の一大避暑地であった軽井沢の俗化を嫌ったことに加えて、日光の中禅寺湖、箱根の芦ノ湖のような水辺レクリエーションを楽しめる湖が軽井沢にはなかったことも原因とされている(安島・十代田, 1991)。その運営は、創立当時から現在もなおNLA(Nojiri Lake Association)という自治組織によって行われている。現在、別荘の所有者の中には日本人もおり、2007年度の神山国際村の別荘戸数は298戸である³⁾。所有者は7月、8月の夏季休暇時期を神山国際村で過ごす。1968年頃の敷地面積は約33万平方km、別荘戸数約300戸であった⁴⁾。



数字は表1に対応

第1図 研究対象地域図

戦後、1950年代中頃から木船に動力機を付けた船が使用され、地元の観光業者による遊覧船事業が行われた。ポンポン船と呼ばれたこれらの動力船は、1960年代後半からはFRP(繊維強化プラスチック)船に転換していった。また、同時期には地元の観光業者によるキャンプ場経営が行われ、1968年には野尻湖周辺に5つのキャンプ場が営業していた⁵⁾。キャンプ場は、流行に伴い高収益をあげ、観光業者にとって優良な経営業種となるが、民宿ブームや大学生の合宿が急増したことから、キャンプ場からホテル・民宿経営への転換が行われた。このように、戦後から高度経済成長期にかけて野尻湖の観光業者は、遊覧船・貸船・キャンプ場・旅館業を組み合わせることによって経営の多角化が進んだ。

一方、1980年代前半までの野尻湖では漁業も行われており、特にハヤ(ウグイ)の漁獲を目的とした刺し網漁が行われていた。漁獲された魚は、千曲川の観光資源である「つけば漁」におけるハヤの補填のために供給された。そのため、1980年代初めまでは、地元の観光業者は春に漁業、夏お

よび秋に観光業と、漁業と観光業を組み合わせる就業形態が見られた。元来、冬の野尻湖では、全面結氷した水面に穴を開けてのワカサギの穴釣りが行われていた。ワカサギの穴釣りは釣り客が独自に行うために湖畔の観光業者に恩恵はなく、そのため冬は出稼ぎを行うものもいた。しかし、20数年前から野尻湖が結氷しなくなり穴釣りが行えなくなったことで、カマボコ船によるワカサギ釣りが観光業者にとっての冬期の経営業種となり、周年で操業を行えるようになった。カマボコ船は、今から35年ほど前に地元の観光業者によって開発された。カマボコ船の利点は、船体が屋根で覆われているために、寒さの厳しい冬期でも屋内で暖かくワカサギ釣りが楽しめることと、移動することができるため、釣りをするポイントを船長の判断で変えることができることである(写真1)。山下(2006)によると、諏訪湖においても1980年代後半から結氷期間が急減し、1992年からは全面結氷日が一日もない年が続いたことで、野尻湖のカマボコ船に類似した「ドーム船」によるワカサギ釣りが営業を始めたと報告されている。おそら

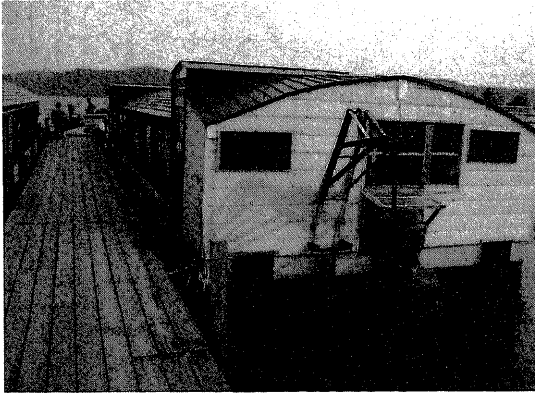


写真1 ワカサギ釣りに用いるカマボコ船
船内には水面に直接釣り糸を下ろすことができるように溝がある。釣り客は暖かい船内で釣りを楽しむことができる。

(2008年6月 横山撮影)

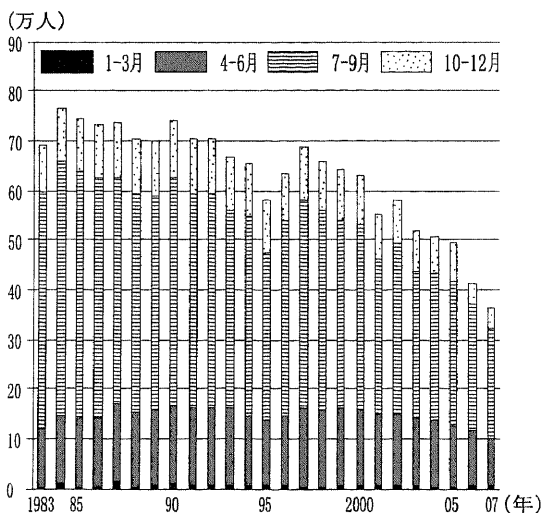
く野尻湖の場合も、全面結氷しなくなった時期は諏訪湖と同時期と思われる。なお、現在野尻湖では野尻湖漁業協同組合の組合員53名のうち、自給用のために漁業が行うのは5名のみであり、商業目的の漁業は行われなくなっている。

野尻湖は、外国人が避暑に訪れるようになって

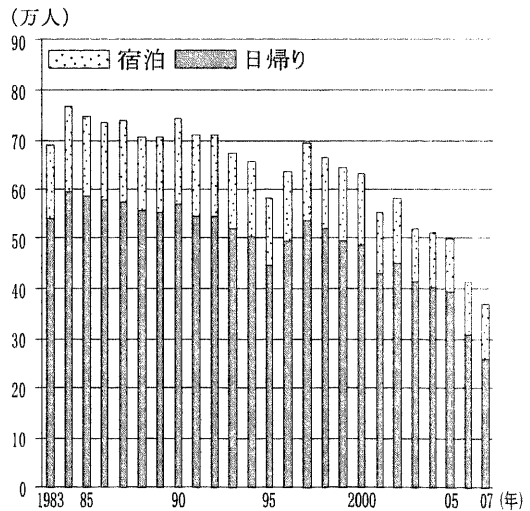
たことから、ヨットやカヌーといった外国からのマリレジャー文化が早くに定着した(白崎, 1988)。現在の野尻湖では、ヨットやカヌーなどに加えて、モーターボートを使うウェイクボードや水上バイクなどのマリレジャーも行われている。野尻湖ではこのようなマリレジャーの体験・講習を専門に扱う業者もおり、大会が行われることもある。

第2図は、バブル経済期前にあたる1983年から2007年にかけて野尻湖を訪れた観光客数の推移を、日帰り・宿泊の別および季節別に示したものである。これによると、現在の観光客数は年間約35万人と、ピークにあたるバブル経済期の年間約70万人に比べてほぼ半減しており、バブル経済期以降、野尻湖全体としては観光客の減少という苦しい立場に立たされていることがわかる。また、日帰り客と7～9月の観光客が全体の4分の3を占めている状況は一貫して変わっていない。特に10～12月の観光客が減少しており、7～9月の観光客のウェイトは相対的に増加している。冬季観光客の減少はスキープームの縮小によるものと考えられる。

a. 季節別



b. 宿泊・日帰り別



第2図 野尻湖における季節別および宿泊・日帰り別観光入込客数の推移

(長野県観光統計資料より作成)

Ⅲ ブラックバスフィッシングの実態

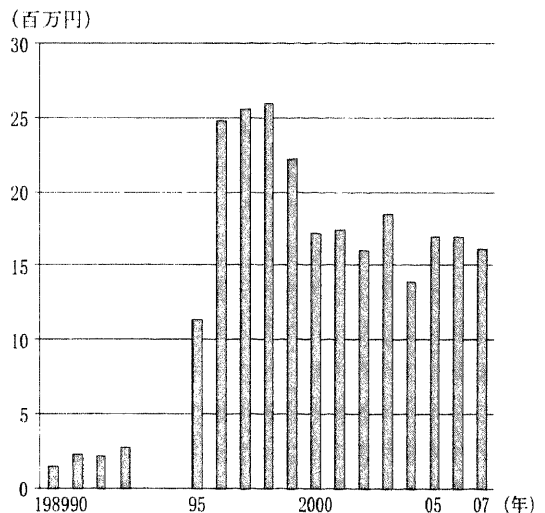
Ⅲ-1 バスフィッシングの導入

野尻湖でブラックバスの生息が確認されたのは、オオクチバスが1983年、コクチバスが1991年とされている（北野，2007）。当時は、ブラックバスの遊漁対象魚としての価値は浸透おらず、野尻湖の在来魚に被害を与える害魚と考えられていたために漁業者によるブラックバスの駆除が行われた。駆除方法は、漁業者の網に掛ったブラックバスを野尻湖漁業協同組合（以下、漁協）が一匹500円ほどで買い取るという買い取り制をとっていた。しかし、効果が見込めず⁶⁾、当時の漁協の組合長は、バスプロ⁷⁾で東京や千葉でバスフィッシング店を経営していたT氏に野尻湖のブラックバスの対策について相談した。1991年、野尻湖においてT氏がバスフィッシングを行い、野尻湖のブラックバスが日本には生息していないと考えられていたスモールマウスバスであることが判明した。当時、日本の河川湖沼にはオオクチバスしか生息していないと考えられていたため、この発見は日本のバスフィッシング愛好家達に大きな衝撃を与えた。そこで、ブラックバスをただ駆除するのではなく、ルアーフィッシングを許可することで、釣り客を呼び込み、観光に活かす方向が提案された。外来魚であるブラックバスに対する不信感も当時の漁協組合員の中には強かったが、漁協内で協議を重ねた結果、1995年よりルアーフィッシングを解禁とすることが決定された。その後、T氏をはじめとしたバスプロによるアピールの結果、コクチバスがいる湖として野尻湖は脚光を浴び、日本中からバスフィッシング愛好家が訪れることとなった。その盛況ぶりは、当時野尻湖一帯にあった200艘ほどの手漕ぎボートがすべて釣り客で埋まるほどであった。また、バブル崩壊以後の不況に加え、長野オリンピックに伴う新幹線、高速道路等の交通網の整備が行われたことによって宿泊客が減少していた時期でもあったため、バスフィッシングの解禁は、停滞する野尻湖の観光業にとって救世主となった。野尻湖では、それま

でも冬期のワカサギ釣りなどの釣り目的で観光客が訪れることはあったが、概して観光業に対する影響は小さいものであった。

第3図は、1989～2007年にかけての野尻湖における遊漁料収入の推移である。野尻湖でバス釣りを行う際は、一日525円の遊漁券を漁協加盟店において購入しなくてはならない。そのため、遊漁料収入の変化から、野尻湖を訪れる釣り客の推移を把握することができる。1995年のルアーフィッシング解禁に伴い、遊漁料収入は、翌年には200%以上成長しており、飛躍的に増大している。観光客数も1995年から増加傾向が見られ、バスフィッシング導入の影響が見て取れる（第2図）。バブル崩壊以降から現在にかけて減少傾向を見せる観光客数に比べ、遊漁料収入はバスフィッシングブームのピークと重なる1998年を境に減少こそあれ、2000年から現在までは安定した観光業種であることがわかる。

ブラックバスは水温に応じて活性が高まるため、春から秋にかけての季節が釣りに適している。そのため、野尻湖では毎年4月25日～11月第1週をバスフィッシングの期間と定め、11月第1週以降をワカサギ釣りの期間として分けている。なか



第3図 野尻湖における遊漁料収入の推移
(野尻湖漁業協同組合業務報告書より作成)
1993年および1994年はデータなし

第1表 野尻湖畔の観光業者の経営形態（2008年）

類型	経営体番号	観光サービス ¹⁾				観光業者労働力構成 ²⁾										雇用労働力(人)	
		宿	R	M	W	貸船		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	常勤	臨時	
						BB	他										
I	1	156	○	○	1	35	132	×					▼		●	6	10
	2	70	○		1	6	14		▼××				●▼		●▼		
	3	40				13					●		▼		●		1
	4	40			2	10	15			●▼			▼				
II	5	20	○	○	1	16			●		●▼					2	
	6	18			1	21			●●×		●▼						1
III	7		○		2	24	16			●▼			▼		●		
	8		○			22	4			●			▼	●			2
	9		○	○		15	30						●				

1) BB:バスポート 他:バスポート以外の貸船(手こぎ・足こぎボート、スワンボート、ヨットなど)
 宿:宿泊 R:レストラン及び軽食 M:マリンレジャー W:ワカサギ釣り 宿の欄の数字は収容人数を表す
 2) ●:男性 ▼:女性 ×:他就労または学生

(聞き取りにより作成)

でも、5月中旬～6月はブラックバスの産卵期(スポーニング)にあたるため、ブラックバスも浅瀬に移動し、卵を守るなど、ルアーに対する活性が高まるために釣れやすくなる。よってこの時期は、バス釣り客も多く訪れ、一年で最も湖岸が賑わう時期である。

Ⅲ-2 観光業者の経営形態

野尻湖畔で宿泊業や貸船業、飲食業など観光関連産業を営業している経営体は、そのほとんどが野尻湖漁業協同組合の組合員であり、組合の加盟店としては全部で20の経営体がある。そのうち、13の経営体について聞き取り調査を行い、バス釣り客を主要客にしている9の経営体について、その労働力、観光業として取り入れているサービス(貸船業・ワカサギ船・水上レクリエーション・レストラン・宿泊・)を一覧にした(第1表)。本報告では観光関連産業に携わる経営体を便宜上「観光業者」と呼称する。ここでは、野尻湖のバス釣り客を主要客とする観光業者の経営形態について見ていく。

バスポートの保有台数は観光業者により様々で

あるが、バス釣り客を主要客とするものは概して10台以上は保有している(写真2)。バスポートには2人～3人りの船体にエンジンがついており、魚群探知機が装備されたものもある。エンジンは2馬力から150馬力と様々であり、2馬力のボートは運転に船舶免許は不要だが、それ以上のものは運転に河川小馬力限定船舶または5級船舶免許が必要となる。レンタル料は、150馬力のバ



写真2 バス釣り客でにぎわう栈橋
 夕方、バス釣りを終えた釣り客がボートを返しに来ている。観光業者が出迎え、釣果などを語らい合う。
 (2008年6月 横山撮影)

スポーツで一日約26,000円、2馬力で約8,000円と馬力に応じて異なる。このほか、野尻湖ではエンジンを搭載していない手漕ぎボートや足漕ぎボートも釣り用に貸し出している。バスボートの貸船の客単価は平均3,000～4,000円と高く、バスフィッシングブームのピーク時には粗収入が年間2,000～2,500万円ほどにもなった。

すべての観光業者はバスフィッシングの導入以前から野尻湖畔で宿泊業や飲食業、貸船業を営んでおり、バスフィッシングが解禁されたのち、バスボートを導入してバス釣り客に対応してきた。バス釣り客を主要客層とする観光業者を経営形態から類型すると、元々宿泊業を営み現在も高い宿泊客収容人数を誇るⅠ（1, 2, 3, 4）、元々飲食業を営み現在は貸バスボートと組み合わせているⅡ（5, 6, 7）、バス釣り客が宿泊することのできる小規模宿泊施設と貸バスボートを営んでいるⅢ（8, 9）の類型に分けることができる（第1表）。湖畔でも卓越した収容施設を持つ経営体番号1を除き、Ⅰに比べてⅡ、Ⅲの形態の観光業者は平均20台と多くのバスボートを保有しており、貸バスボートへ傾斜していることがうかがえる。ちなみに経営体番号1は、バスボート以外の貸船の数も多く、修学旅行などの団体客を誘致してカヌー教室を行うなど、大規模な経営を行っている。

貸バスボートはこの地域の観光業者にとって、有利な夏期の経営業種の一つであり、すべての観光業者は、貸バスボートのほかに、マリンレジャー体験および教室や、冬のワカサギ釣り、他地域での仕事を組み合わせた複合経営を行っている。経営体番号4, 5, 9の3経営体がヨットやウェイクボード、水上スキー体験および教室といったマリンレジャーを行っている。経営体番号1, 2, 4, 5, 6, 7はワカサギ船を取り入れている。これらは春・夏期のバスボート貸船と組み合わせて周年的に集客を図ることができる。一方、経営体番号3, 8, 9は、息子がスキー場でインストラクター（3）、レンタルスキー業務（8）、スキー場関係の仕事（9）を行うなど冬期は他地域で別な仕事を持っている。特に、経営体番号8と

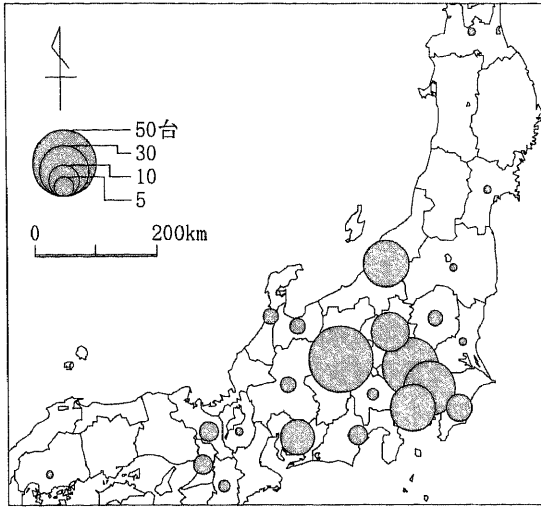
9は他地域で行っていたスキー関係の仕事が本業であったが、現在は貸バスボートが夏季の重要な収入源となっている。また、いくつかの経営体では、個人のバスボートの係留、ボートの修理・販売および免許講習なども行っている。

このように、湖畔の観光業者にとって、バス釣り客に対応した貸バスボートは春・夏季の経営業種であり、冬季のワカサギ釣りや他地域におけるスキー関連産業を組み合わせることで季節に応じた周年的な複合経営が行えている。バスフィッシングのブームは2000年頃をピークに、現在その市場規模は縮小傾向にある。聞き取りを行った13の経営体のなかには、バスフィッシングブームが一過性であることを予見し、バスボートの導入を控えた経営体もいた。バス釣り客の人口自体は増えていないが、今のところ、それぞれの経営体では個別に経営を行えるだけの固定客を確保しているため、しばらくは持続的な経営が行えると考える。観光業者の年齢構成からも、およそ半数の5経営体には20～30代の後継者がおり、バスフィッシングによる経営を前向きにとらえている。

Ⅲ-3 バス釣り客の集客圏

第4図は、野尻湖畔の駐車場に駐車されている車のナンバープレートから作成した野尻湖を訪れるバス釣り客の集客圏である。調査日は一日ではあるが、バスフィッシングの繁忙期の週末にあたるため、一般的な傾向は把握することができる。計測された駐車台数は全部で251台であった。

県別に見ると、長野県が53台、埼玉県が40台、東京都が34台、神奈川県が27台、新潟県が25台、群馬県が16台、愛知県が14台、千葉県が8台、京都府・大阪府・静岡県がともに4台、富山県・石川県・栃木県・岐阜県がともに3台、山梨県・奈良県ともに2台、青森県・宮城県・福島県・茨城県・滋賀県・広島県が1台ずつである。野尻湖を訪れるバス釣り客の出発地は、長野県・群馬県・新潟県といった近隣諸県と、首都圏の埼玉県・東京都・神奈川県に多いことがわかった。さらに、長野県においては松本より長野ナンバーの方が、同様に



第4図 野尻湖を訪れるバス釣り客の出発地
(2008年6月の現地調査により作成)

新潟県においては新潟より長岡ナンバーの方が多いことから、より野尻湖に近い範囲からの集客が多いことがわかる。

首都圏からの集客が多い理由には、1997年に上信越自動車道信濃町インターチェンジが開設され、野尻湖が東京から日帰り可能な場所となったことが挙げられるだろう。聞き取りによれば、信濃町インターチェンジが設置されてからはバス釣り客に占める日帰り客の割合が多くなり、現在では約7割が日帰り客である⁸⁾。このような交通網の変化は、首都圏からの集客の誘因となる一方で、宿泊客の減少にもつながっている。

Ⅲ-4 野尻湖の観光的水域利用

第5図は、漁協への聞き取りと資料をもとに、野尻湖における観光的水域利用の状況を図化したものである。この図と聞き取りから、バスフィッシングとマリレジャーとの水域利用における空間的な競合関係を検討する。野尻湖では、ウェイクボード、水上バイク、ヨットなどのマリレジャーと遊覧船、そしてバスフィッシングが湖面を利用する。その際、ウェイクボード、水上バイク、遊覧船は利用範囲および航路が決められてい

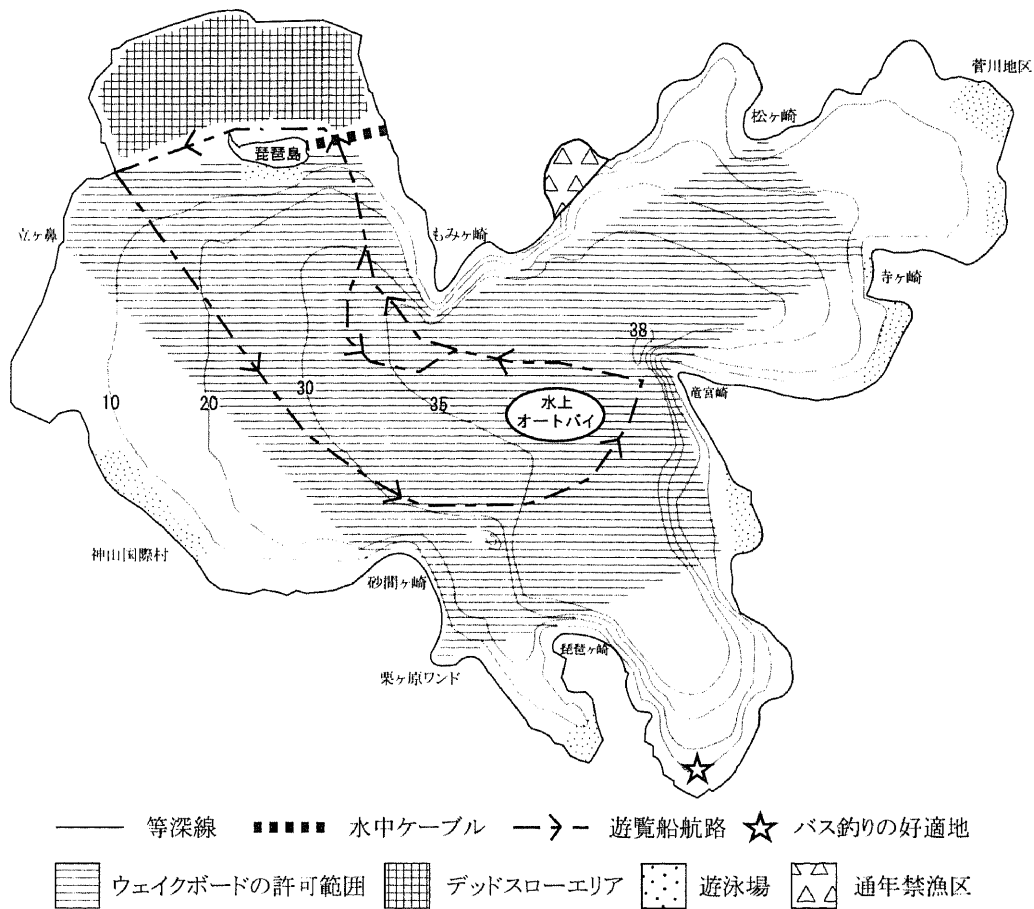
る。具体的には、ウェイクボードは琵琶島より南側の立ヶ鼻と、砂間ヶ崎、栗ヶ原ワンド、琵琶ヶ崎、竜宮崎、寺ヶ崎、松ヶ崎、もみヶ崎を結んだ線の内側で、各遊泳場を避けた水深20mより深い範囲である。ウェイクボードの範囲の中には遊覧船の航路や水上バイクを行う場所も含まれている。ちなみに、現在野尻湖において遊覧船の運航を行っている会社は1社のみである。

一方、バスフィッシングは、「遊覧船の航路上では釣りをしないこと」という点と、琵琶島北側のデッドスローエリア⁹⁾ではアイドリング走行しなくてはならないという点を除けば、釣りを行える空間的な範囲に制限はない。そのため一見、湖面中心部を利用するウェイクボードや水上バイクなどのマリレジャーとバス釣りの水域利用が競合するように見えるが、ブラックバスは水深7~8mという比較的浅いところに生息し、沿岸に産卵床を作るといった性質があるため(北野, 2007)、バス釣りはウェイクボードの利用範囲内では行われぬという特徴がある。観光業者が推奨するバスフィッシングのポイントもこうした沿岸部である(第5図)。この点において、マリレジャーとバスフィッシングは湖面利用において双方の利用の調整が図られており、現時点では大きな事故は起こっていない。

Ⅳ バスフィッシング導入の意義と課題

Ⅳ-1 バスフィッシング導入の地域的意義

明治末より外国人のみならず日本人にとっても避暑地として機能してきた野尻湖畔では、バブル経済崩壊以降一般観光客の減少にさらされてきた。それには、不況に伴った国民の余暇活動の減退に加えて、観光行動が従来の「見る観光」から「する観光」へと移行してきたことも無関係ではない。このような状況の中で、野尻湖では日本には生息しないと考えられていたコクチバスが発見されたことで、当時高まりを見せつつあったバスフィッシングという新しいレクリエーション需要に対応してルアーフィッシングを解禁した。これにより



第5図 野尻湖における観光的水域利用

(1/10000湖沼図「野尻湖」および野尻湖漁業協同組合提供資料により作成)

バス釣りの好適地は地元の観光業者への聞き取りによる。

観光業者は複合経営による周年的な経営をとることができ、地域経済の振興に大きな影響を与えた。経済的意義が地域の人々にも認識されていることは、日本各地でブラックバス・ブルーギルの再放流禁止が採択される中において¹⁰⁾、野尻湖におけるブラックバスのリリース禁止をめぐる措置に見てとれる。長野県では、2003年6月からブラックバス・ブルーギルの再放流が全域で禁止されることが決定した。これを受け野尻湖では、漁協の青年部を中心にバスのリリース禁止がもたらす経済的影響を憂慮して、再放流禁止に反対する要望書を長野県内水面漁場管理委員会に提出した。これにより、2003年5月には、2008年12月まで野尻湖

における再放流（リリース）禁止を延期する通達 がなされた。さらに2004年にはバス釣りが地域にもたらす経済効果をアンケートなどから算定する活動をしている。現在は、流出河川を封鎖するゾーニング（棲み分け）措置を、東北電力の取水口部分に施し、リリース禁止を撤廃してもらうよう働きかけている。

このように野尻湖では、ブラックバスによる経済的意義は大きいものがある。こうした対応をとることができる最大の要因は、青柳（2003）も指摘するように、現在の野尻湖においては漁業が既に行われなくなっているため、生業とバス釣り関係産業との対立が起こらなくなっているからであ

ろう。また、湖面を利用する観光業者が、漁協という上部組織によって統一されていることも、湖の利用をめぐり、コンセンサスを得たうえでの行動が行えることにつながっているだろう。

Ⅳ-2 バスフィッシングの課題

野尻湖では、バスフィッシングが地域経済の振興に大きな役割を果たしてきた。しかし、バスフィッシングの存続については大きく3つの課題がある。

第一には、外来魚の是非に関する議論の動向である。2003年には琵琶湖におけるリリース禁止条例に対してタレントの清水國明が禁止撤廃を訴えて訴訟が起こり、2005年には特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（特定外来生物被害防止法）の策定に関して、当時の環境大臣小池百合子氏がオオクチバスについて批判するなど、現在、バスフィッシングは行政や漁業者などブラックバス反対派と、釣り関連産業やバス釣り愛好者など賛成派との間でその議論が激化している。

第二には、バスフィッシング客の高齢化がある。聞き取りによれば、バスフィッシングは、芸能人によってメディアでも取り上げられていた2000年頃にピークを迎えている。現在、バス愛好者は、流行を迎えていた時期に20代や30代であった現在30～40代の人達であり、若年層が少ない。外来魚問題に伴ってバスフィッシングに対する世論が批判的になることは、若年層がバス釣りを始めることを阻害し、バスフィッシングの高齢化につながるだろう。バスフィッシング客が高齢化することは、バス釣りという余暇活動がいずれ衰退してしまうことを意味するため、若年層を取り込むような活動が、今後のバス釣り関連産業に求められているだろう。

第三には、首都圏などからのアクセスが容易に

なったことによる野尻湖の通過型観光地化である。野尻湖では信濃町インターチェンジが近隣に開設されたことにより、首都圏からのアクセスが向上した。それは一方で宿泊客の減少につながる可能性がある。こうした宿泊客の減少を受けて、いくつかの観光業者では、貸ボートと宿泊を組み合わせたプランを作るなどの対策をとることで宿泊客の確保を図っている。

V おわりに

本報告では、長野県上水内郡信濃町に位置する野尻湖におけるブラックバスフィッシングの導人と現状を明らかにするとともに、地域に与えた意義について論じてきた。

伝統的な保養観光地として機能してきた野尻湖は、バブル経済崩壊以降日本人の余暇活動が低迷する中で観光客の減少にさらされ、長野オリンピックに伴う交通網の整備による宿泊客の減少など観光関連産業の低迷に拍車がかけられていた。このような中で、バスフィッシングの隆盛という新しいレクリエーション需要に応え、1995年に始まるバスフィッシングの解禁は、停滞する観光業にとって、有利な夏季の業種となり、冬季のワカサギ釣りやマリンレジャーなど既存の観光業種と組み合わせた複合経営をとることで周年的に集客を図ることが可能になった。現在、バスフィッシングの流行は過ぎ、市場規模は縮小傾向にあるが、地元観光業者は固定客を得ることで持続的な経営が臨める。

しかし、外来魚に対する批判的な世論の高まりの中で、バスフィッシングという行為に対する世間のまなざしの悪化も懸念される今日、バスフィッシング客の若者離れやそれに伴う高齢化、宿泊客の減少といった問題も課題として残されていることも明らかとなった。

2008年6月1日～6月7日にかけての現地調査に際して、野尻湖漁業協同組合組合長の石田和夫様をはじめとした野尻湖畔の観光業者の方々には、繁忙期にも関わらず多大なご協力を賜りました。また、信濃町役場商工観光係係長の伊藤均様からは資料の提供など他大なご協力を賜りました。また、本稿を作成するにあたり、手塚 章先生をはじめとする筑波大学生命環境科学研究科の先生方からご指導を賜りました。お世話になった全ての方のお名前を挙げることはできませんが、ここに記して深く感謝申し上げます。

[注]

- 1) 日本魚類学会自然保護委員会編 (2002) P27.
- 2) 信濃町誌編纂委員会編 (1968) P1116.
- 3) NLA (2007) の記述による。
- 4) 前掲2) P1089.
- 5) 前掲2) P1106-1107.
- 6) 卯田 (2005) は、琵琶湖における有害外来魚駆除事業を事例に、漁師が外来魚の駆除を自己の生業歴の空白期間に組み入れ、「獲れるときに獲る」という対応を繰り返してきたために、本来駆除すべきである孵化後の稚魚期や産卵期などの期間に駆除できていないと指摘し、外来魚駆除などの自然再生には漁師なり生業者の「生業の論理」を組み入れた方法を構築すべきであると結論づけている。
- 7) 釣り関連メーカーと契約しているプロのバス釣り師。
- 8) 野尻湖畔の観光業者への聞き取りによる。
- 9) デッドスローエリアとは、アイトリング走行する範囲である。モーターボートは波が立つため、岸に近い部分では係留されているボートが波で動かされ、ぶつかるなど悪影響を及ぼすおそれがある。そのため観光業者が多く立地している北西側においてデッドスローエリアが設けられている。
- 10) 例えば、1991年に新潟県においてオオクチバス・コクチバス・ブルーギルの再放流が禁止となり、この動きを受けて、2001年に岩手県、2003年に秋田県、滋賀県琵琶湖などでも同様の規制が設けられている (青柳, 2003)。

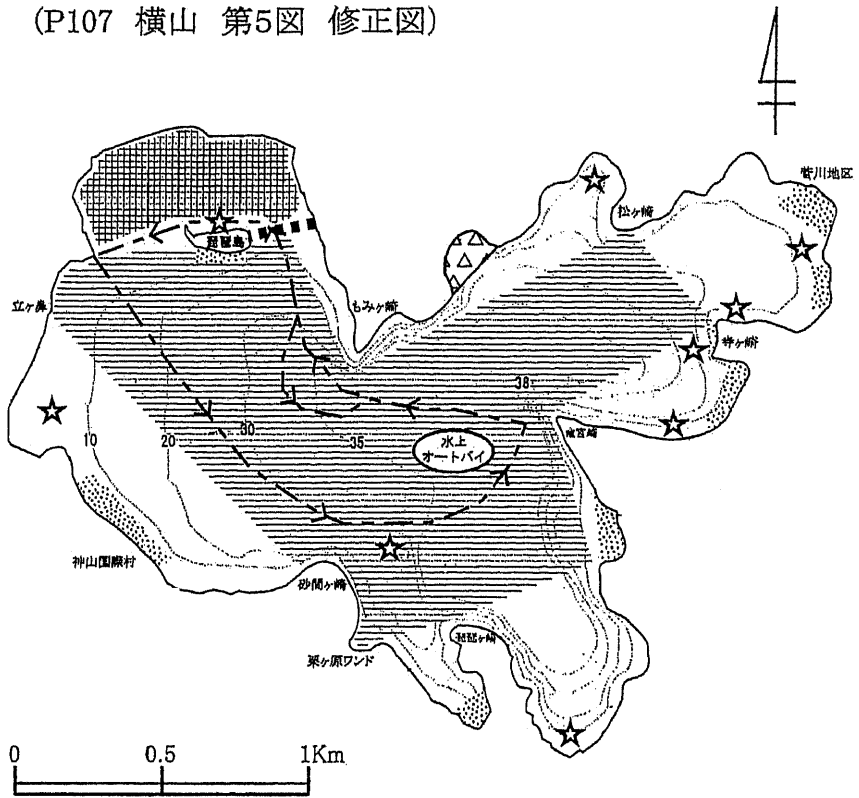
[文 献]

- 青柳純 (2003) : 『ブラックバスがいじめられるホントの理由 環境学的視点から外来魚問題解決の糸口を探る』つり人社。
- 荒木一視 (1995) : 千歳市支笏湖における地元観光業とマリンレジャー客の空間共有。旭川大学紀要, 40, 123-136.
- 池俊介 (2001) : 伊東市富川におけるスキューバダイビング導入に伴う地域社会の変容。新地理, 48 (4), 18-37.
- 卯田宗平 (2005) : 「生業の論理」を組み入れた自然再生のあり方 - 琵琶湖・有害外来魚駆除事業の事例から -。環境社会学研究, 11, 202-218.
- 北野聡 (2007) : 野尻湖におけるブルーギル・ブラックバス類の繁殖状況。長野県環境保全研究所研究報告, 3, 87-91.
- 梶羽正昭 (1991) : 群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成。地理学評論, 64A, 818-838.
- 佐藤大祐 (2003) : 霞ヶ浦地域におけるプレジャーボート活動の展開と行動水域。地学雑誌, 112, 95-113.
- 信濃町誌編纂委員会 (1968) : 『信濃町誌』信濃町。
- 白崎謙太郎 (1988) : 『日本ヨット史』舵社。
- 日本魚類学会自然保護委員会編 (2002) : 『川と湖沼の侵略者 ブラックバス』恒星社厚生閣。
- 安島博幸・十代田朗 (1991) : 『日本別荘史ノートーリゾートの原型ー』。住まいの図書館出版局。

- 山下重紀郎 (2001) : 諏訪湖畔における観光資源の多様性と地域間提携. 地域調査報告, 23, 135-145.
- 山下重紀郎 (2006) : 諏訪湖の環境変化と観光業者の対応. 環境情報科学論文集, 20, 177-182.
- 山村順次 (1989) : 富士山北東麓山中湖村における観光地域の形成と機能. 千葉大学教育学部研究紀要, 37, 217-245.
- 山村順次 (1995) : 『新観光地理学』 大明堂.
- 山本清龍 (2002) : 山中湖にみる保養地及び観光地としての史的展開と空間構造について. ランドスケープ研究, 65, 773-778.
- Nojiri Lake Association (2007) : 『2007 NLA Year book』 NLA..

(2008年11月28日 受理)

(P107 横山 第5図 修正図)



- 等深線 ■■■■ 水中ケーブル →・ 遊覧船航路 ☆ バス釣りの好適地
- ▨ ウェイクボードの許可範囲 ▩ デッドスローエリア □ 遊泳場 △△ 通年禁漁区

第5図 野尻湖における観光的水域利用

(1/10000湖沼図「野尻湖」および野尻湖漁業協同組合提供資料により作成)

バス釣りの好適地は地元の観光業者への聞き取りによる。